わたげアンケートの所見

支援級

・『支援教育』を知っていると回答した小学生保護者は 65.1%、中学生保護者は 69.0%
　→言葉を知っていても、内容理解に至らない者はさらに多いと推察される。
　→保護者に対して『支援教育』を含むさまざまな情報が届いていないのではないか

・支援級在籍児保護者における支援教育満足度は、満足・やや満足合わせて小学校では 56.1%、中学校では 53.1%
同じく不満・やや不満合わせて小学校では 42.8%(無回答 1.1%)、中学校では 46.9%。

・個別指導計画があると回答した小学生保護者は 80.8%、中学生保護者は 75.9%
・個別指導計画がないあるいは無回答だった小学生保護者は 19.2%、中学生保護者は 23.9%
→『計画は立てて指導されているようだが、実際にじっくり見たことがないうえ、計画・評価・面談もしたことがない。ゆえに、適切な学習をしているか不安』というコメントもあり、相模原市は支援級在籍児全員分の個別指導計画を学校から提出されていると回答しているが、保護者の実感は伴っていない。

・個別指導計画があると回答した者のうち、そのための面談があると回答した小学生保護者は 80.5%、中学生保護者 95.0%
・個別指導計画があると回答した者のうち、そのための面談がないあるいは無回答だった小学生保護者は 19.5%、中学生保護者は 8.0%
→相模原市は保護者と相談しながら個別指導計画を作成すると回答しているが、行われているのか?

・個別支援計画があると回答した者のうち個別指導計画が配布されていると回答した小学生保護者は 75.0%、中学生保護者は 77.3%
・個別指導計画があると回答した者のうちその配布されていないまたは無回答だった小学生保護者は 25.0%、中学生保護者は 24.0%
→保護者に配布しないまま関係機関との連携や現場での活用ができるのか?

・個別指導計画が面談時机上にないあるいはみたことがない(その他)わからないと回答した小学生保護者は 50.9%、中学生保護者は 47.4%
　→相模原市教育委員会は机上に置くことを推進していると回答しているが、実際に行われているのか?

・個別指導計画があると回答した者の個別指導計画に対する満足度は満足・やや満足合わせて小学生保護者 69.4%、中学生保護者 48.0%
・個別指導計画があると回答した者の個別指導計画に対する満足度は不満・やや不満および無回答合わせて小学生保護者 30.6%、中学生保護者 52.0%
・支援教育に不満・やや不満と回答した者のうち『自分のニーズに応じた支援・指導内容がもっと必要だと思うから』を選択したものは小学生保護者で 55.2%、中学生保護者で 80.0%
→個別指導計画はあるが、学校側と保護者側に計画内容・実行性を含む活用方法などにかい離があるのでは？

・校内体制が整っていると回答した小学生保護者は 25.8%、中学生保護者 9.3%
・校内体制が整っていない・どちらでもない・無回答合わせて小学生保護者は 24.2%、中学生保護者 87.5
・校内体制等を利用したことがない支援級在籍児の小学生保護者は 75.2%、支援級在籍児の中学生保護者 78.1%
→新・相模原市支援教育推進プランによると支援体制の充実項目『支援教育コーディネーターが中心となり関係機関、専門機関、保護者との連絡調整等を行った小・中学校の割合』は 88.0%となっているが、保護者の実感とは差異が大きい。

・使用教科書がわからない(その他)と回答した保護者は小学生保護者で 25.8%、中学生保護者は 31.2%
・使用教科書が適していると回答した小学生保護者は 33.7%、中学生保護者は 18.8%
・使用教科書が適していない・どちらでもない・わからない(無回答)66.3%、中学生保護者 81.3%
→有益な個別指導計画が作成・実行できているのか？

・個別の教育支援計画(**支援シート**)が活用されていないあるいは活用されているかわからないと回答した小学生保護者は 53.9%、中学生保護者は 62.5%
・個別の教育支援計画が活用されていると回答した者のうち、内容に不満・やや不満あるいはどちらでもないと回答した者は小学生保護者で 38.4%、中学生保護者 33.3%
→新・相模原市支援教育推進プラン『支援教育の充実』項目によると、『支援シートを活用することにより、支援の必要な子どもに関係する人たちが、本人のライフステージに沿った継続的な支援をする』となっているが、活用されていないのではないか？

・支援級において満足・やや満足と回答した者のうちその理由に交流及び共同学習を挙げた小学生保護者は 28.0%、中学生保護者は 23.5%

・→アンケート結果をみると、小学生保護者は満足している理由を『・保護者の意見をきいてくれる・他学年との関わりがある』とあるが中学生保護者は理由を挙げていない。さらに満足と回答しているものの『・ニーズに応じた指導を受けているか・・・？正直恵まれている方だと思う・新しい先生が来て　きちんとやってくれる』という意見(小学生保護者)もあり、不安定な交流が続いていることがうかがわれる。
不満・やや不満と回答した者のうち交流及び共同学習を挙げた者は小学生保護者 36.8%、中学生保護者は 53.3%
→小学生保護者が感じている不満の中身は『・人手不足 4 名・校内の連携不足・先生がころころ変わる。良い先生にあたっても限られた時間で思うように対応してもらえない。教育に計画性があるか疑問。たまたま担当になり誠心誠意対応してくれる先生がどれだけいるのか・先生が一生懸命やってくれるので、要求できず困っている・時間割の内容について少し不満がある』中学生保護者が感じている不満の中身は『・人手不足・障害を理由に学校での活動(交流・部活など)や登校を規制され、技能科の授業を受けることも禁止されたりしたから・交流で全て活動したいので、参加できる方法を議論してほしい』などの意見もある。**別紙参照**
文部科学省ではよりよい交流及び共同学習を進めるために HP 上で呼びかけているが、実際には人手不足をはじめ校内体制の不備、交流及び共同学習の重要性が理解されないことや障害に対する無理解による差別的な扱いも感じられる。

・『**人手不足**』についてコメントしている者は小学生保護者で 20.2%、中学生保護者で 13.8%
→『人手不足で交流に行けない』『水泳の時間プールに入れない時などは、学校に午後から登校するよう指示される』『先生は皆忙しく、個別に教える時間がとれないと言われ、その後進研ゼミでの学習を強く勧められた』『先生が交流の行事につきそうと他の子が自習になる』『同じ支援級の子が行かないから、うちの子も行けない』といった意見もあり、支援級はもとより学校全体の人手不足が支援級在籍児の学習に大きな影響を与えていると考えられる。

・支援教育に不満・やや不満と回答した者のうち『教員の専門性がない』を選択したものは小学生保護者で 47.3%、中学生保護者で 93.3%
　中学校の専門性について不安に感じているとコメントした小学生保護者が 6 名いた。
・『教員の専門性』についてコメントしている者も加えると小学生保護者 65.7%、中学生保護者 93.3%
→小学校でできていたことが中学で出来なくなる(例:床に寝転がる、挨拶ができない、字が乱暴になるなど)
→中学生保護者の方が教員の専門性を不安に感じている結果が出た(小学校を卒業した中学生保護者ならではの感想では？)。

・中学進学への不安を訴えている小学生保護者か 10 名。そのうち、中学校支援級を見学後不安を感じたとのコメントが複数あった。
→中学生保護者からのコメントは『教員の専門性がない(9 名)』が多く　前項と合わせると、小学校では浸透しつつある支援教育だが　中学校では小学校ほど浸透していないのか？
・中学生保護者からは進学への不安も多く挙げられている。
→小学生保護者からは校内体制や指導方法、内容または学習への期待や要望が多く聞かれたが、中学生保護者からはほとんど聞かれなかった。保護者の意識に差が出ている。支援教育が始まって今年で 7 年目である事を考慮すると、今後中学においても校内体制や指導方法、内容または学習への期待や要望が多くなることが予想される。

小学生保護者からは『軽度のための不安(8 名)』が多かった。支援級は重度・軽度ではわけていない。特別支援学校高等部は重度の生徒から入学させる(別紙参照)。

・『**交流**』欄をチェックあるいは『交流』についてコメントしている小学生保護者で満足していると回答した者は 18 名、不満があると回答した者は 22 名の合計 40 名。『交流』に関心がある者は 44.9%。
・『交流』欄をチェックあるいは『交流』についてコメントしている中学生保護者で満足していると回答した者は 4 名、不満があると回答した者は 8 名の合計 12 名。『交流』に関心がある者は 37.5%。
→『交流』に関心の者の割合は小学生保護者で高い傾向にある。

・支援教育に満足していない理由に『**ニーズに応じた支援・指導内容**がもっと必要』を選んだか、コメント欄に同様の内容の記載があった者は小学生保護者で 43.8%、中学生保護者で 56.2%
→『パニックを起こすお友達への先生の対応に問題があり、けがをする子が多い』『学校に通いだしてから毎日不安定』『視覚支援などの支援教育にはあたりまえの支援がなく特性理解がない』『本人のいいところを引き出し、出来ない所を補って出来るようにして欲しい』『教室が乱雑で教師の意識が低く、保護者の質問に答えられない』『息子の本質を理解しない。自閉はこういうものと決め付けすぎている』『情緒級の子どもたちの扱い方、学習の仕方など全くわかっていない』『学習よりもお手伝いの方が大切と言われた』『ベテランの先生(50 代後半)二人が、支援教育とは何か？や障害の特性をわかっておらず、子どもが二次障害になってしまった』などのコメントからは**障害特性の理解**があまり感じられない。
→『視覚優先の生徒であれば、ノートにキーワードを示すなどのきめ細かい支援が欲しい』『時間はかかるがひとりでできるような事もお友達にサポートさせていて、先生方はその光景を“ほほえましい”と感じていたようだが、保護者としては出来ることはひとりでやらせてくれたらいいのにと思っている』『出来ることはさせたいが、支援級に在籍している

というだけで登下校も一人でさせてもらえない』『幼稚園的な工作を高学年でもやらされる』『指導方法は教育ではなく保育に近い』『望むべき授業の形にならない。持っている知的能力が封じられていく』『楽しく○○に参加する、○○をやってみる、あいさつができるなどあいまいな表現のめあてや目標はやめて欲しい』『支援級のレベルが高すぎて正直ついていけていない』『高学年になっても６年間同じ内容の学習をする』『学校で部活動に参加させてもらえない』『自分の担当以外の生徒に無関心』『中学の支援級では定期テストがないので進学できるか不安』『支援級の担任が個別の時間に簡単なプリントしかさせてくれず勉強が進まないばかりか後退している』『事前準備をしてから交流に行って欲しい』『本人の力に応じた内容の学習をして欲しい』『苦手な教科を無理して交流している』『先生の障害感を押しつけられる』『校長が、支援級の先生の特殊学級的なお考えを変えるのがとても難しく、今年度は無理だと言う』『重度の生徒よりの授業が多く、うちの子に合っていないと感じる』というコメントからは、**障害を持つ生徒のニーズに合った指導方法の確立**がされているか疑問を感じる。

・『障害はなく集団行動が苦手なので支援級に入りました』とコメントがあったが、**支援級の役割**とは何か?

未就学児

・未就学時の就学相談において『普通級がよいか支援級がよいか迷う』というコメントがあった。
→普通級と支援級の違いや、選択の際の判断基準など不明確な部分も多く、保護者を無用に惑わせている。

・『放課後等デイサービス』がどこも空いていないので利用できるか不安
→療育機関や放課後等デイサービスが足りない。情報不足。

・入学にあたり　学校側の体制・同級生の質に不安。お友達については、『運』というようなことを言われた。

小学校普通級

・感謝しているというコメントが 62.5％ある反面、教員の専門性(具体的な支援の方法)や無理解(障害特性の理解がない先生が多い)で同数の 62.5％の人が困っている。
・支援教育学習指導補助員が１名いるが、校内に 1 名では学習面までのフォローはむずかしいとのコメントもあり、人手不足はここでも指摘されている。
・『社会での無理解』を挙げている者 62.5％
→その特性のためいじめられたりからかわれることも多く、また学習の偏りがある場合でも逃げているととらえられたりと、障害への無理解に悩む姿がうかがえる。

中学校普通級

・『中学校に普通級と支援級の間のクラスがあればと思う』『中学校でなくても、ことばの教室のような所に通えたら、保護者も子どもも交流ができて励みになるのに』というコメントが２名中２名。
→普通級の中では適切な支援が得られず、親子で悩んでいる姿がうかがえる。

・『発達障害を理解した職場に就職できるか不安』２名中２名。
→共生社会をめざすインクルーシブ教育が浸透していない。

特別支援学校

・支援教育について満足・やや満足合わせて 73.9%
・満足・やや満足と回答した者のうちその理由に教員の専門性を挙げた者は 43.4%
・満足・やや満足と回答した者のうちその理由に教員の接し方がよいを挙げた者は 56.5%
・満足・やや満足と回答した者のうちその理由に教員が熱心を挙げた者は 52.1%
→満足と回答している者が多い半面『面談の時に机にふせて寝てしまう担任。最低です。同席している残りの２名の先生もそれについて何も言わない』というコメントがあった。
・校内体制は整っていると回答した者は 69.5%
・個別指導計画があると回答した者は 95.6%(無回答１名)
・個別指導計画があると回答した者のうち使用教科書がない(わからない)と回答した者は 59.0%
・個別指導計画あると回答した者で使用教科書が適していないまたはどちらでもない(わからない)と回答した者は 63.6%
→『子どもの知的レベルに合わせた絵本を購入しているようだが、授業は体感遊びが多いので使用していない』というコメントがあった。
→特別支援学校中等部では 5 名中４名が使用教科書がわからないか適していないまたはどちらでもないだった。
→特別支援学校高等部に在籍している者のコメントで『中学の時配布された教科書は全く使用されないまま家に持ち帰ってきた』というものがある。
・高等部で教科書はないまたはわからないと回答した者は８名 66.6%
・高等部で教科書が適しているかどうかについての回答は、どちらでもない・適していないと回答した者は 83.3%
→特別支援学校から地域支援として　地域の小中学校に助言することがあるが、この状況で学習に対しての助言が可能か?
→小学部においては漠然とした就労への不安が、高等部になると『学校で行われている実習・作業学習などがはたしてどの程度将来に役立つのか』『親が自分でいろいろ見学してとここぞと思うところを見つけてなどと言われるが、最後には希望の所に必ずしも行けるわけでわないと言われてしまう』『1.2 年の時には校内実習しかさせてもらえず、３年なって職場体験に行けると思ったのに、そんなことしてる場合ではないと先生に言われる』などのコメントが増える。
→適切なキャリア教育がされているのか?

まとめ

・依然人手不足が続いておりさまざまな場面でみんなが実感している。人手不足による適切でない指導により子どもの成長が妨げられていると感じている保護者が多い。
→人手不足解消のための予算計上のほか、ボランティアの確立などの方策を早急に立てて欲しい。ボランティアを大学生などの一部に頼るだけでなく、相模原市全体で地域に呼びかける方法を模索できないか。

・個別指導計画の意義について現場はもとより保護者にもよく理解されていないと感じる。教科書の選択をはじめ個別指導計画に基づき計画的継続的な学習が保証されるため、活用されないと弊害が大きい。
→保護者にも個別指導計画の意義について説明される場をつくれないか。また学校においても個別指導計画を確実に実行し、それを評価してさらに次年度につなげることができないか。

・保護者からは、障害特性の理解不足により不安に感じるというコメントが多く、個々の障害特性をいかに学校側に理解して頂くかが今後の課題ではないか。
→支援シートのさらなる活用により、障害特性を学校及び関係機関に周知できないか。そのためには支援シート書式の改善とルールの徹底が必要ではないか。

・保護者からは、教員の専門性に不安を感じるというコメントが多い。支援教育(交流及び共同学習の方法や合理的配慮についてなど)・具体的な指導方法・障害特性の理解(教員個人の固定観念による指導、差別的な発言)など、現行の支援教育をどう教員に理解して頂くか。
→教員研修を保護者も体験し、情報の共有を図れないか。

以上のようなアンケート結果から、『わたげ』では、教育委員会をはじめ市内の教員および保護者向けに、支援教育にかかわる事項を網羅したハンドブックの作成を提案します。現行の新・相模原市支援教育推進プランでは細かい点が保護者・教員の双方によく理解されていないため、もっとわかりやすく具体的なものが必要です。それには就学相談の方法から学校教育の支援の方法・交流の意義と参加の仕方、工夫など今まで一部だけでしか共有していなかった情報を保護者にも開示するものであるべきと考えます。相談員は支援級に在籍していると使えないとか、交流は自立でないと行けないとか、学校見学は一度だけなど、偏った考え方がされないようなハンドブックになるように期待します。

わたげアンケート所見　神奈川県

未就学(5 名)

・5 名中 3 名が支援教育に深い関わりのある事柄について、わからないと回答している。
→『個別の指導計画』『個別の教育支援計画』についての説明を誰がするのか、明確にして欲しい。学齢期の先も綿々と続く教育支援計画が、早期に提示されることが重要であると感じる。
『相談できる場所が周りになかったので不安でした。小さなことでもすぐに相談できる場所が欲しいです』というコメントがあった。
→相談先の情報が、必要時に　必要な人に届いていないようだ。
『うちの子はダウン症です。療育施設では、発達障害の子の療育がメインで　知的障害を持つうちの子のような子は放っておかれている感じがします』というコメントがあった。
→せっかく療育機関に繋がった人でも『個々に応じた支援』を感じられないことで、保護者は不安感をぬぐえない。保護者は具体的な助言や支援を求めているので、もっと個々に寄り添った支援が必要なのではないか。
『将来高等部になって、地域の学校へ通えなくなったときに、バスと電車で 1 時間以上の通学が自立でできるのか、大変不安です』というコメントがあった。
→先輩ママらの話を聞く機会がなく、具体的にわが子の成長した姿を想像することができない。保護者は、行政側にそのような場を提供いただくとともに、リーフレットの作成や情報のデータベース化などで、タイムリーな情報発信を期待したい。ただし、現状では地域や学校で差があるので、ガイドラインは必要である。

支援級(小学生 16 名中学生 6 名)

・支援教育を知っていると回答した保護所は全体で 17 名 77.3%。そのうち小学生保護者は 81.3%、中学生保護者 66.7%。
→全体に行き亘っていない。中学の方が理解されていない。
・『個別指導計画』があると回答した保護者のうち満足と答えたのは 9 名 40.9%。小学生保護者が 50.0%、中学生保護者 16.7%。不満と答えたのは 59.1%。小学生保護者 50.0%、中学生保護者 83.3%。
→『個別指導計画』があってもさまざまな不満・不安は解消されていない。
・『個別指導計画』『個別支援計画』は呼称も似ているためか、教員・保護者双方にきちんと理解されていない。
→差異を明確にして欲しい。

・『個別の支援計画』を活用されてると答えた小学生保護者は 31.3%、中学生保護者は 16.7%。活用されていないまたは無回答の小学生保護者は 68.7%、中学生保護者は 83.3%。活用されていると回答した小学生保護者の中で満足・やや満足と答えた者は 60.0%、中学生保護者は 1 名中 1 名 100%。
→平成 18 年度から作成を進めているが、7 年経過している今日、その書式や作成方法・活用するための工夫なの見直しが必要ではないか(参考資料中の用語に特殊学校や養護学校など現在使用されていない語句が出てきている)。
→就学相談終了後進学のために支援計画を受けとる保護者がいるため、それをもって活用とみなす者も多いと思われる。それでも活用されていないと感じている者もいる。
・現在受けている『支援教育』について満足していないまたはあまり満足していないと答えた者のうち、自分のニーズに応じた支援・指導内容がもっと必要だと思っている者は 40.9%(小学生保護者 31.25%中学生保護者 66.7%)、教員の専門性がないを選択した者は 54.5%(小学生保護者 43.8%中学生保護者 83.3%)、関係機関との連携が良くないを選択した者は 45.5%(小学生保護者 43.8%中学生保護者 50.0%)
→個々に応じた支援を感じられていない、教員に専門性がないと感じている中学生保護者は小学生保護者のほぼ 2 倍いる。『もっと個別でいろいろやってほしい』『教員によって差がありすぎる』というコメントがあった。
・校内体制が整っていると答えた保護者全体では 22.7%、小学生保護者 31.3%、中学生保護者 0.0%。
・校内体制を利用したことがないと答えた保護者全体では 40.9%、小学生保護者 37.5%、中学生保護者 50.0%。
→校内体制は特に中学校で活用されていないようだ。
・使用教科書が適していると答えたのは 22.7%(小学生保護者 31.2%中学生保護者 0.0%)
・使用教科書が適していないまたはわからないと答えたのは 77.3%(小学生保護者 68.8%中学生保護者 100.0%)
・教科書はないと回答した小学生保護者 4 名、中学生保護者が 2 名いた(22 名中 6 名　27.3%)。
→小学校ではプリント学習や下学年の教科書を使用して学習を積み重ねていた者が、中学になって中学用の教科書を配布されたのに　プリント学習中心だったり、教科書を持ち帰らないのでわからなかったりするようだ。
・『交流』欄をチェックあるいは『交流』についてコメントしている者は 27.3%(小学生保護者 31.3%中学生保護者 16.7%)
→中学生保護者の交流関心度が低いことがわかる。インクルーシブの考え方が保護者に浸透していないのはもとより、学校にも理解されていないようだ。
・支援教育に満足していると答えた者のうち『教員の接し方が良い』を挙げているものはは 9 名中 6 名(66.7%)小学生保護者は 8 名中 5 名(62.5%)中学生保護者 1 名中 1 名(100.0%)
・支援教育に満足していないと答えた者のうち『教員の接し方が良くない』を挙げている

者は 13 名中 6 名(46.2%)小学生保護者 8 名中 2 名(25.0%)中学生保護者 5 名中 4 名(80.0%)
→中学生保護者では教員の接し方に不満を持っている者が多いようだ。
→『教員によって差がありすぎする』『入学してから今まで落ち着いて過ごせず、今年度は毎日親が学校に(授業に)付き添うことが多く負担に思う』というコメントがあった。
・『教員の専門性』欄にチェックしている者は 92.3%。
→『支援級の先生方の知識や対応の仕方が統一していないのでクラスによって子どもたちの成長が違うので納得ができない』『支援級の先生の指導力が無く、専門性に欠け、個々に合った指導がわからずにいる』というコメントがあった。
・支援教育に満足していないと答えた者のうち『ニーズに応じた支援・指導内容』欄をチェックした者は小学生保護者 8 名中 5 名 62.5%、中学生保護者 6 名中 5 名 83.3%。

支援級全体としては、①先生の子どもに対する理解不足②高等部進学時の自立登校時の親の送迎負担への不安③障害が軽度なので手帳取得ができないことやデイサービスがあまりないといったコメントが多かった。
教員ごと・学校ごとに様々な差を感じている者がコメント上 25.0%。『個別級の先生方でレベルが違い、クラス差が激しい』『近隣であっても小学校によって個別級の生徒数から雰囲気・内容・教育方法・教師の力の入れ具合が違うように思える』などのコメントがあった。

普通級(小学生 5 名中学生 1 名)

・支援教育に不満と答えた者は全体の 50.0%。その全ての者が『障害に対する友人の理解がないから』を挙げている。
・支援教育に満足している者のうち『障害に対する友人の理解がある』を挙げているものはいない。
→インクルーシブ教育が浸透していないのではないか。
・支援教育に不満を持っていると回答した者のうち、『自分のニーズに応じた支援・指導』を挙げた者は 100.0%。
・支援教育に不満を持っていると回答した者のうち、『教員の専門性がない』を挙げた者は 66.6%。
→『本人に適した進学先の情報がどこで手に入れたらいいかわからない』『担任の理解がありとても感謝しているが、担任が一人奮闘している姿は、支援教育が担任以外に及びにくく中学が心配』などのコメントからは校内体制が十分とはいえない様子がうかがわれる。

特別支援学校(3 名)

・支援教育に満足・やや満足合わせて 66.7%、不満・やや不満が 33.3%。
→満足していると回答した者の共通項として『教員が熱心』『人権意識が高い』『必要な情報が得られる』がある。
→『将来について、手のかからない　愛される子になることが大切と思っている』『わが子に関わろうとしとくれる子供達が一番の理解者。大人はそれを止めたりジャマして遠ざけたりする。まずはひとりひとりを理解するところからはじめてもらいたい』といったコメントがあった。
→相模原市の特別支援学校在籍児保護者から『今までの小学校の支援級でもそうだったのですが、障害への理解のある先生が対応してくれると、本人も問題なく楽しく過ごし　指示や取り組みもうまく行くのですが、無理解な支援者(先生)の対応になると　指示も聞けなく<悪い子>と言われたことがあります』とのコメントがあった。
→『居住地交流について、受け入れる中学の支援級の先生の度量・技術力・指導力により交流が出来ないという例が見られた』『居住地交流の制度を活用し、地域の学校の先生の<支援学校に行く子たちのレベルは低い>的な見方や意識を変えて頂けるともっとこうりゅうできるのに』というコメントがあった。県と市の連携が不足しているように感じる。

まとめ

・『個別の教育支援計画』の書式を丁寧なものに改善し、県内の他市においても見本となるよう示して頂きたい(添付資料①国立市のものは毎年の見直しの他、校長・担当者・保護者などが押印することを求めている)。
・特別支援学校地域支援をより開かれた、より使いやすくして頂きたい。現行は学校からの依頼により支援を開始することになっているが、保護者からの依頼だけでも支援をして頂きたい。
・特別支援学校には専門性があると認識している。しかしアンケートの中には『面談中に机に伏せて寝てしまう先生がいる』『無理解な先生の対応になると<悪い子>と言われてしまう』『連絡帳の返事がトンチンカン』『先生の知識不足、経験不足、意識の低さに不満。ただの保育になっている』『支援教育は、肢体の子から見て 2,3 歩遅れていると思う』『今年はたまたま良い先生にあたり子供はすごく成長しました』などに記載が多数あった。専門性を期待し特別支援学校に進学したものの落胆する保護者も多い。地域支援の役割もあることから、今後はもっと教員の専門性向上が必要と感じる。
・『肢体の子を安心して預けられる施設があまりない。長期的な計画で障害者やその家族にやさしい制度・町づくり・ディの事業所・療育施設 etc 考えて欲しい』とコメントがあった。もちろん県としてはすでに行っていることと思うが、残念ながら一部保護者に届いていな

い。もっとアナウンス他、県民にわかりやすいアピールが必要だと感じる。
・卒業後の進路について、就労に至るまでの計画や就労先の情報収集は保護者だけでは限度がある。『進学、就職共に定員人数がどこもパンク状態と毎年耳にする』といったコメントもあり、あと少し、保護者に寄り添っていただき情報の開示などにご助力頂きたい。
・国が支援教育を打ち出してから保護者の意識は変わってきている。支援級から特別支援学校に進学するとさまざまな意識の差に驚く。ただ生きていればよいと云った時代ではなく、より自分らしく生きて欲しいと願う保護者が多くなってきている。支援教育に期待する意識が高まりつつある。今後県としては保護者の期待に応えるべく一層のご尽力をお願いしたい。
・『手帳 B 判定でも入学できる特別支援学校が欲しい』『公立の軽度発達障害児の受入先を増やして欲しい(3 名)』『療育手帳がないため就職・進学の支援が手薄になりそうで不安』『高校の支援級をつくってほしい(2 名)』『支援級で学んできた子供と養護<支援>学校で学んできた子供のほとんどが高等部で一緒になるのはどうなのだろうか?』といったコメントが多数あった。中学の支援教育が行き亘らない理由の一つでもあると感じる。県は特別支援学校の定員の見直し、分教室の新規設置、軽度に特化した学校の設置等、特色ある特別支援教育プランを示して頂きたい。
・『特別支援学校が遠い(バス停までも遠い)ので、急な送迎が負担、高等部になったらどうやって通学させたら良いか悩む(4 名)』『特別支援学校の定員が少なく入学できるか不安(2 名)』『分教室・特別支援学校によって実習方法に差があるため学校選びに悩む(2 名)』などのコメントがあった。学校ごとの教育内容・通学距離を考慮した学区の見直し、定員の見直しをお願いしたい。また、子供がひとりで通学できるよう　保護者の希望を聞いて頂きたい。
・『教育委員会は<特別支援学校判定>の児童生徒を地域の普通学校の支援級に入級させる場合は加配をして欲しい』とのコメントがあった。重度の子がいるのでうちの子の支援が手薄になっていると感じている保護者からの意見である。

わたげアンケートの所見　県外

・62..0%の人が『支援教育』に満足していない。
→自分のニーズに応じた支援・指導内容がもっと必要だからと思っている人が 62.5%
→教員人権意識が高くないからが 62.5%
→教員の専門性がないからが 62.5%
→支援教育学習児童補助員等の外部人材が配置されていないが 62.5%
知的障害がない子供が多数支援級に入ってきている現状の中、未だ現場では知的障害児用の学習カリキュラムが採択され続けていることは問題だというコメントがあった。
『難しい勉強は家でやってねと先生に言われていきた子供もおり、知的に障害が無く特別支援級に通っている子供達は、学習に物足りなさを感じている』というコメントがあった。

・『個別指導計画がないので作って下さいというと、忙しいという理由で作っていないとはっきりいわれた』というコメントもあった。

・『支援が無い状態で登校刺激だけされるのは迷惑ですし、見当違いな支援は子供をだめにします。そういうことが分ってきましたので、学校の使えることだけ使わせてもらうというスタンスで落ち着いています』というコメントがあった。

以上からは『個々に応じて』が欠けている他、支援教育に対する無理解が窺われる。
満足に思っている人の中にも、『学校は子供の持つ能力・可能性をどのような方法で判断しているのか知りたい』というコメントもあった。

『担任が変わるたびに教室から追い出されそうになったり、学生ボランティアに入っていただき楽になったり、心を持って接してもらったり、明らかな特別扱いをされ嫌な思いをした』というコメントがあった。

学校内で教員によって対応が違い、学校全体としての取り組みに至っていない。